20221108.ver1

第 17 回　日本胸部外科女性医師の会

－活動報告書－

代表世話人

齋藤　綾　（東邦大学医療センター佐倉病院　心臓血管外科）

世話人

神吉　佐智子（大阪医科薬科大学　心臓血管外科）

山崎　祥子（舞鶴共済病院　心臓血管外科）

はじめに

第 17 回目となる本年は、第 75 回日本胸部外科学会学術集会の第 1 日目に開催しました。一昨年は完全 Web 開催、昨年は会場と Web のハイブリッド開催でしたが、本年は 2019 年以来の会場のみでの開催となりました。欧米諸国において COVID19 に対する感染対策が大幅に緩和され、日本においても感染者数の全数把握を中止し海外渡航者に対する水際対策も大幅に緩和されたため、日本胸部外科学会にも海外から多くの招待演者が来日されました。

今回は、日本における若手医師の外科離れに焦点を当て、テーマを「医療界における潜在的"Machismo"からの脱却－世界の変革過程から学ぶ」と題し、ミネソタ大学医学部心臓胸部外科教授である Rosemary Kelly 先生と、女性医師の就労環境やスウェーデンの医療政策を研究しておられる鳥羽商船高等専門学校准教授である深見佳代先生のお二人にご講演いただきました。パネルディスカッション心臓２「女性心臓外科医が心臓外科の未来を変える？」に引き続いた時間帯であったため、同セッションで座長や演者を務められた先生方にも多数ご参加いただきました。ご講演と質疑応答を含め 50 分間という限られた時間でしたが、世界のジェンダー・イクイティの潮流について知見を深めていただき日本の現状について考察する機会となったのではないかと拝察いたします。

日本胸部外科学会事務局、第 75 回日本胸部外科学会事務局ならびに会頭　中島淳先生並びに分野会長（心臓）荻野均先生には多大なるご尽力をいただきました。この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

第17回　日本胸部外科女性医師の会

医療界における
潜在的“Machismo”からの脱却
ー 世界の変革過程から学ぶ

“Machismo（マチズモ）”とは「男っぽさ、誇示された力、男性優位主義」のことです。
依然として外科を選択する女性は少なく、若手男性医師の外科離れも進んでいます*。
（*日本労働研究雑誌、深見佳代先生、2020年）
外科離れの背景に、医療界、特に外科における性別を超えたMachismoが
潜在するのではないでしょうか。

日時

2022年
10/6 THU　12：00〜12：50
お弁当をご用意しています

会場

第75回日本胸部外科学会定期学術集会
パシフィコ横浜
展示ホールＡポスター・口演会場

講師

Rosemary F. Kelly 先生
University of Minnesota Medical school
Professor for Cardiothoracic and Vascular Services

深見 佳代 先生
鳥羽商船高等専門学校 一般教育科　准教授

座長

神吉 佐智子　（大阪医科薬科大学）
小前 兵衛 先生　（東京大学）

主催　／日本胸部外科女性医師の会　　共催／日本胸部外科学会・日本医師会

概要

日時：　2022 年 10 月 6 日（木）12：00～12：50

会場：　第 75 回日本胸部外科学会定期学術集会
展示ホール A ポスター・口演会場（パシフィコ横浜）

講師：　１．Rosemary F. Kelly 先生
(University of Minnesota Medical school, Department of Surgery,
Professor and Executive Vice-Chair for Cardiothoracic and Vascular Services)

２．深見 佳代先生（鳥羽商船高等専門学校 一般教育科 准教授 ）

座長：　小前 兵衛先生（東京大学）、神吉 佐智子（大阪医科薬科大学）

会費：　無料（学会参加登録は医学生・研修医は無料）

主　催：日本胸部外科女性医師の会
共　催：日本胸部外科学会、日本医師会

参加者一覧（敬称略）

氏名	所属施設
中島　和江	大阪大学医学部付属病院
清原　久貴	東邦大学医療センター大橋病院
秋山　瑠里	東邦大学
渡辺　健寛	西新潟中央病院
竹ケ原　京志郎	兵庫医大
篠原　周一	愛知県がんセンター
池田　知歌子	金沢医療センター
小泉　淳一	岩手医大
杉山　佳代	愛知医大
圓尾　文子	加古川中央市民病院
落合　由恵	JCHO 九州病院
徳野　純子	McGill Univ
石田　理子	半田市立半田病院
土屋　那津子	中外製薬
久保　友次郎	岡山大学病院
永江　理美	金沢大学
井上　尚	独協医大
小前　兵衛	東京大学
深見　佳代	鳥羽商船高等専門学校
齋藤　綾	東邦大学佐倉病院
Rosemary Kelly	Univ Minnesota Medical School
神吉　佐智子	大阪医科薬科大学

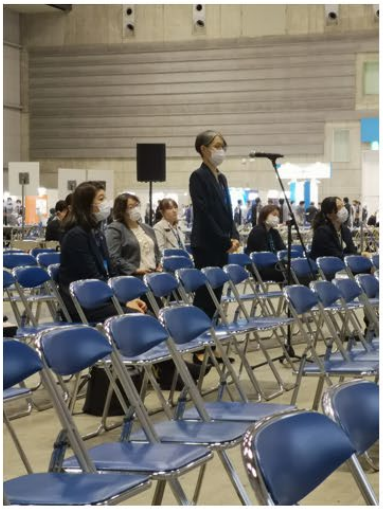
講演内容

米国の医学部教授であり米国胸部外科学会（American Association for Thoracic Surgery：AATS）で Secretary を務めておられる Rosemary Kelly 先生に、“Women in Cardiothoracic Surgery Leadership”と題してご講演いただきました。米国においては、20 年以上前から医学部の卒業生は男女比がほぼ同数でしたが、やっと最近になって臨床及び基礎医学プログラムにおいて同様の男女比を反映する医学部が出てきました。これに続いて、Cardio-thoracic surgery：CT surgery (以下、心臓胸部外科)においても女性医師数は明らかに増加しています。以前から産科婦人科と小児科では女性医師が大多数を占めていますが、外科では女性医師は少数です（外科 26%、整形外科 19%）。同様に、外科では女性がリーダーシップポジションに就いている割合は非常に低く、外科では 6.3%、整形外科では 0.8%にとどまります。2016 年の報告では、胸部外科においては助教と准教授は女性の方が男性よりも多いにもかかわらず、教授は圧倒的に男性の方が多く、心臓外科ではその傾向が顕著です。Kelly 先生は外科レジデント、心臓胸部外科レジデント、准教授、教授、と順調にキャリアを積まれ 2019 年に講座主任となられました。Kelly 先生のキャリアと共に、それぞれの地位における女性の割合は増加してきました。2022 年の報告では、米国において女性の心臓胸部外科専門医は全体の 7.5%、354 人です。日本においては、医学部の卒業生における女性の割合が増加傾向で、女性の心臓胸部外科医は増加してきていますが、医学部教授などのリーダーシップポジションに就くことはほとんどないだけでなく、学会などでも評議員などの上位ポジションに就くことはごくまれであることが報告されています。ただ、米国でもやっと心臓胸部外科専門医における女性の割合が 7.5%になったところです。たった 354 人しかいません。外科においては、米国が日本よりも先行しているということはないのです。医学部卒業生の半数を女性が占める米国では、女性が心臓胸部外科を選択しなければ、今後さらに需要が増加する心臓胸部外科医が不足することになります。State of Women in Medicine レポートでは、医学界の女性には依然として重大な障壁があり、女性には専門職への昇進と常勤ポストへの平等な機会がないと報告されています。この認識は燃え尽き症候群、離職率、生産性の低下などの問題につながっている可能性があります。外科などの女性が 30%未満の部門では、性別に基づく軽視が最大の問題となっています。女性を外科手術に惹きつけるために、女性が指導的立場について認識と文化を劇的に変える必要があります。女性医師による治療成績は、内科でも外科でも男性医師に劣っていません。世界に目を向けると、女性の心臓胸部外科医の数が増加してます。カナダ、イギリス、ヨーロッパのほとんどは米国と似た傾向で、スペイン、イタリア、ブラジル、コロンビアなどには何十人もの女性 心臓胸部外科医がいます。また、米国胸部外科学会（AATS） は女性会員の募集に力を入れており、2020 年現在、70 人近くの女性が AATS のメンバーとなり、学会に多様性がもたらされています。AATS ではこの状況をさらに改善させる方向に進んでいます。「A lot to do！－すべきことはまだまだある－」のスライドで講演を締めくくられました。

深見佳代先生は、新進気鋭の経済学者でこれまでにスウェーデンの医療政策や京都大学消化器外科　大越香江先生らと女性医師の就労環境研究に取り組んで来られまし

た。今回は、「若手医師の外科離れと職場文化」と題して Gender Challenges Faced by Female Physicians in Sweden: A Literature Review, （2022 年、北ヨーロッパ研究 第 18 巻）を基にお話しいただきました。2018 年のデータでは、我が国の女性医師率は 21.8%で OECD37 か国中で最下位、対してスウェーデンは 49.3%でいずれも経時的に増加しています。医師数が男女でほぼ同数となっているスウェーデンでも、外科系診療科に女性は少なく、世界中の外科の職場文化が若手医師（特に女性）を遠ざけているのではないかと推察されます。そこで今回は、直近 10 年間に発表されたスウェーデンの医学部や病院に所属する人を対象とした研究報告をご紹介いただきました。臨床実習中にジェンダーステレオタイプに晒され、女子学生は良心的で勤勉で責任感があると言われ、家庭や子供が前提のキャリアアドバイスを受けたり看護師と勘違いされたり、患者やスタッフからケア労働を要求されやすいなどの経験があり、こうした場面で女子学生は目立ちにくくなるように外見を整えて場に溶け込むようにしています。反発や抗議をしないことで学生らは性差別や不平等を肯定している立場となっていることを自覚し自分を責めるようになります。女性は不快な職場文化を避けるため消去法で診療科を選択する傾向があります。外科には「権力の乱用」、「性差別的冗談」、「マッチョな隠語や態度」が蔓延しており、これは同意できない職場文化と認識されており、男性医師から女子学生に対して、自分の同僚になる可能性がないかのように話しかけられることが外科への関心を消失するきっかけとなっていました。日常的に積み重なる微妙な不快感や些細な経験の繰り返し（マイクロ・アグレッション）が、女子学生のキャリア志向を阻害し、専門分野の選択における男女分離のパターンを永続化させています。医学部では、権威ある立場の医師が発する不適切な発言が許容され、ジェンダー教育が軽視されています。日本では、医学部や病院における職場文化（特に外科）を研究した論文は限られており、国際的な男女格差ランキングで日本の順位が低いことと、ジェンダーバイアスの存在を推測させる事例はいくつかあることから、日本の職場文化も快適さに課題があると推測されます。2018 年には医学部での女性受験生差別問題に複数の大学が関与していたことが明らかとなりました。数年前の日本外科学会のコンセプトビデオでは、家族団欒中に父親が時間外手術に呼び出される場面が描写されていました。さらに、若手外科医減少への抜本的対策について述べた［炉辺閑話］では、外科医減少の改善には労働環境改善ではなく仕事中毒の人間を増やすことが必要で、手術は性行動に酷似しているため性への執着が強い人間を増やせば外科医は増えるという趣旨であり、医学界以外の目で見れば、外科は性的冗談が広く共有された文化と見受けられます。45 歳未満の男女別医師数の変化は、20 年間で男性は 120 人減少し女性は 70 人増加していますが、男性医師の急激な減少を女性医師数では補えておらず、このままでは外科医数は減少の一途となります。もし、日本においても医学部卒業生の男女数が同数となったとして、現存の性差別文化を解消しなければ診療科偏在は続き外科医の増加にはつながらないと予想されます。まずは上位的立場へのジェンダー教育が必要ですが、同時に、外科医それぞれもジェンダーバイアスのある職場文化を再生産する立場になりうることを自覚する必要があります。

会場風景



おわりに

2020 年 2 月ごろから世界を混乱に陥れた COVID19 パンデミックは、当初の予想を裏切り 2022 年 11 月現在も我々の生活に影響を与えています。ワクチン接種励行と感染予防策の徹底によって、日本も SARS-COV2 ウイルスとの共存を目指す方向に転換しました。本年は久しぶりに胸部外科学会に現地参加することができました。現地で参加すると、日常業務から完全に切り離されて集中力が高まった環境の下、横断的に最新知見を学ぶことができるように企画されており、新しいアイディアが湧くこともありました。セッション終了後に、座長や演者や参加者の皆さんや学会事務局の方々と交流することができ、憧れの先生方の立ち居振る舞いを目の当たりにしたり、声をかけていただいたり、学会特有の華やかな雰囲気が味わえました。本会には、主催者を含め 22 名の皆様にご参加いただきましたが、所属施設による参加制限や、手術や緊急対応や日常業務、さらに育児や介護などの家庭内業務のために現地に来れない先生方も COVID19 以前同様にたくさんおられたと思います。本会は特に若手医師や女性医師を主な聴衆として企画しているため、パンデミック中に経験した Web 開催やハイブリッド開催やオンデマンド視聴などの「学会の新しい開催方式」を継続することは来年以降の課題と考えます。

今回のテーマに挙げた“Machismo（マチスモ）”とは「《男らしい男を意味するスペイン語の macho に由来し》、男っぽさ、誇示された力、男性優位主義」のことです。今回ご講演いただいた深見先生は経済学のご専門で、私たちが日常的に受容している環境が Machismo 的であり、社会全体では共有できない価値観で成り立っていることを指摘されました。最近注目されている Unconscious Bias（無意識の偏見）の一つです。Kelly 先生のご講演でも、米国においても外科に女性医師が少なく、医師の半数が女性である米国では外科医不足が深刻な問題となっています。上位職に女性医師が就いておらず、ジェンダー・バイアスが女性医師を苦しめており、「マチスモ」「職場文化」「マイクロアグレッション」の存在も疑われます。日本でも、女性医師数とその比率は今後急速に増加することが予想されます。現時点で、女性の社会参画で先を走る国々の問題意識と解決策を先取りできれば、日本は遅れを取り戻せる可能性があります。医療界、特に外科における潜在的な Machismo を早急に自覚し乗り越えるべきだと感じました。

最後になりましたが、無事に会合を開催することができ、温かいご理解とお力添えをいただいた皆様に、この場を借りて心より感謝申し上げます。今後とも胸部外科学の発展を願い、忌憚ないご意見やご指導を賜りたく、世話人一同お願い申し上げます。

（文責：神吉　佐智子）

令和 3 年から令和 4 年度会計報告

収入

前年度繰越金	1,010,973
日本医師会支援金（胸部外科学会より入金）	79,051
利息	10
合計	1,090,034

支出

第 16 回集会開催費用	
講演者謝礼	85,685
講演者交通費	27,630
切手、封筒	132
チラシ、ポスター費用	3,660
雑費（郵送費）	11,340
弁当代	49,500
ホームページ改正	5,500
レンタルサーバー利用料金	7,920
振り込み手数料	770
合計	192,137
次年度繰越金	897,897

（円）